強面騎士団長と異世界人

ヒスイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
強面騎士団長と異世界人

【Ｎコード】
Ｎ６２６３Ｖ

【作者名】
ヒスイ

【あらすじ】
強面騎士団長とトリップしてきた女性のほのぼのラブラブ生活のんびり進んでいきます。

登場人物メモ

篠宮　優季　シノミヤ・ユウキ

２０歳　高身長で男に間違われる
超絶美形。濡れるような黒髪に緑の瞳。
父親に仕込まれたので強い。

グレンさんのギャップに萌える今日この頃。

グレン・メイサス

２４歳　２メートルぐらいの大男
赤い髪に水色の瞳。顔は整っているもののそれを帳消しにする怖さがある強面。
初対面の人はほぼ全員顔をそらす。中身は良い人。
自分を怖がらないユウキに好意を寄せる。
純情。顔に表情がでない。無表情で無口。
ギャップが激しい。

騎士団長の悩み

大陸最大の国　センテスト王国には騎士団が存在しその騎士団長と言えば
誰もが知るほど有名である

【笑う子も泣き大人も逃げ出す】ほどの強面で長身の２４歳　独身
グレン・メイサス　その人である。
真面目で仕事一筋　実力も十分あるのだが彼には直属の部下がいないのである。
その原因は全て彼の顔にあった。

なにも顔が引くほど酷い訳ではないむしろ精悍に整っている。
だが顔が怖いのだ。入りたての新人は彼の視線を受けて一回は皆気絶する程に。

彼の部下になると言う事は同じ部屋で仕事をすると言うことであり、
壮絶な強面男と長い時間一緒に
いると言うことにもなる。なので皆志願しないのだ。
以前副団長のヒューイが無理矢理つけさした者がいたが一日後には
泣きながら退職届けをだしたのだった

その事があってからもうグレンは諦めたのだった。――俺はそんなに怖いのか――と

グレン自身は何も見た目通りの人間ではない。
昔から顔が怖いとずっと人から避けられ続けた彼だが彼は性格はひん曲がってはいなかった。
副団長の方がずっとひん曲がっている。

だからこそ彼は悲しく思うのだ。

盗賊が出たと言う報告があれば退治しに行って盗賊と村人に間違えられ
怪我をした子供を助けようとしたら泣きながら逃げられ
友人達にも「その顔まじ怖ぇ、絶対部下出来ねぇわ」と笑いながら言われ

などと言う事が頻繁に起これば彼だって傷つくのである。

そんな彼が己を怖がらないトリップしてきた女性に会うのは数日後である。

拝啓　お父様お母様へ　異世界へトリップした娘より

拝啓　お父様　お母様

あなた方の娘として生きてこれた２０年　本当に幸せでした。
朝仕事へ出かけた私が帰って来ないとなればさぞ心配なされておられるのでしょう。
特にお母様は得意の引き篭りを発動されていることでしょう。
お父様、お母様をなんとか慰めて引きずり出してくださいね。
私はあなた方の娘です。どんな状況でも最後まで諦めず生きていきたいと思います。
大丈夫です。お父様とお母様の血を引いている私にはゴキブリ並みの生命力があるでしょう。
そして叶うのならば再びお父様とお母様に会いたいです。

ですがこれだけ言わせてください

「ど～してこうなった」

ど～してこうなった

「・・・・ど～してこうなった」

ポツリと私は心の中で両親に対する手紙を読んだ後呟いた。

私　篠宮　優季　は朝まで普通の日常を歩んでいたはずなのに。
朝の事を振り返りながら思う。

朝、仕事場へと向かう途中の事だった。今日は空が青くて良い日だ、
何て思いながら空を見ながら
歩いていたのがいけなかったのだろうか。

それは突然の事だった。右足を踏み出した所に本来あるべき道が無
かったのだ。
そのまま当然ながら私は落ちた。

そして今に至る。
今私は森だと思われる場所にいる。
落ちてきた時に気絶でもしたのだろうか?気づいたら此処にいた。

・・・ど～するよ　私・・・・

大した怪我は無いようなので一安心なのだけど、このまま此処にい
たら死ぬんじゃない?私
森には野性の動物がいるだろうし・・・多少はなんとか出来るけど・
・・

・・・暗くなってはいけない!

私はあの両親から産まれたのだから、きっと何処でも生きていける！いや、生きていこう！

「まずは・・森から出たいけど、何処から出れるかわからないや・・」

父に教えられた事を思い出す。

「もしもの時は冷静に、落ち着いて行動するのが大事な事だよ」

それが父に幼い時に教わった言葉だ。
父は絶世の美形なのだが少し変わっている。
普通娘に護身術や生き残る術はなかなか教えないだろう。

「でもまさか役に立つ時がくるなんて・・ね」

心の中で父に感謝しながら周りを見渡す。

・・・・何か気配が近づいて来ているのは気のせいだろうか
バサバサと音を立てて鳥が飛び立つ音が聞こえる。
動物が派手に音を立てながら遠ざかって行くような気もする。

・・・・何が近づいてきているんだろう
・・・・早々に私の命の危機がこないことを願う。

森の中で出会いました

だんだんと気配が近づいて来て
ガサリ　と目の前の茂みが揺れた。

・・・あの・・人です・・よね。熊っぽいってちょっと思いましたけど。
うん・・何かその人の周りに変な威圧感漂ってるけど・・。
身長でかいですね。私も父に似て高身長で男に間違われるのですけど、私よりでかくて
２メートルぐらいありますよね。

いやいやいや　人は見た目じゃなくて中身！そうですよね、お父さん！
それに顔が異常に怖いだけであって顔は整われてますし、赤い燃える様な髪に氷の様な冷たい水色の
瞳がとても綺麗だ・・・。

ぼうっと少しの間その人に見とれる。よく見るとそんなに怖くも無いんじゃないかな。

「おい　大丈夫か？」

その人が近寄ってきながら私に問い掛ける。

「はい・・」

座ったまま答える。

「・・・お前は俺が怖くないのか？」

その人は表情こそ無表情でいるのだが驚きを混ぜた声で聞いてくる別に慣れれば全然怖く感じないのだ。

「はい・・あの、助けていただけるのですか？」

そう　これが一番大事だ。この人が助けてくれないと次は何時人が来るかわからないのだから。

でもこの人悪い人だったらどうしよう・・。そんな事はないと思うのだけど・・。

もしそうだったら全力で逃げよう。今はこの森から出してもらいたい。

「その為にきた・・この森を出る。歩けるか？」

「はい・・痛っ！・・・・」

立ち上がると足首が痛んだ。どうやら軽く捻挫していたようだ。

「・・無理そうだな。おぶろうか？」

彼からの提案に一瞬思考が止まる。

・・いや～その～私男性に接触する事なんて無かったもので～

恥ずかしいじゃないですか～。あはははは～

というくだらない事を考えた。

「ほら、乗れ」

そう言いながら背中を差し出してくれている。・・いい人だ。
・・これ以上待たせるのもアレだし。ここは御好意に甘えて・・・。
むしろ私の事男性だと思ってるんじゃないですか？うん、そうに違いない。
今の格好も男装といっても差支えない格好だし。

「で・・では御好意に甘えさせていただきます」

「ああ、どうぞ」

彼の背中におぶさる。
正直言って恥ずかしい。幼い頃父にしてもらった事はあるものの恥ずかしい。
いい大人が知らない人にしてもらうのは恥ずかしい。

「お・・重かったら降りますので言って下さい」

「いや、重くない軽いぐらいだ」

「そ・・そうですか」

「ああ」

そんなやりとりがあった後彼が言う。

「この森を出たら俺の家があるから一先ず来るといい。傷の手当もしよう」

き・・傷の手当までしてくれるなんて・・。い・・良い人だ。
見た目とのギャップがあるけど・・。ハッ！これが友人の言ってい

たギャップ萌え！？

「本当にありがとうございます。ご迷惑おかけしてすみません」

「いや、見たところ何か事情があるようだが悪い人物には見えないからな。助けるのは当たり前だ」

ほ・・・本当に・・いい人だーーーーーー！！！

「ありがとうございます・・私　篠宮　優季　と言います」

「シノミヤ・ユーキ？珍しい名前だな。シノミヤが名前か？」

えーと・・こちらでは名前が前いくるのかな

「いえ・・私の故郷では名前が後ろにくるので・・こちらでは違うのですね」

「ああ・・と言う事はユーキ・シノミヤか？良い名前だな」

「ありがとうございます。貴方のお名前は？」

「グレン・メイサスだ。」

「メイサスさん・・とお呼びしたらいいですか？」

「グレンでいい。俺もユーキと呼んでいいか？」

「はい！もちろんです！」

「そうか・・もうすぐ俺の家だ」

グレンさんとの会話をしながらもグレンさんは結構なスピードで森をグングン歩いていく。
速いなぁ～。でも、これでも抑えてるんだろうな。

そうして森を抜けるとすぐ傍にはでかい屋敷があった。

てっ・・デカッ！こんな家見たことないんですけど。

「さあ着いたぞ。はやく傷の手当をしなければな」

そう言いながらこれまたなかなか見ることの無いような大きな門を片手で開ける。
普通の人ではなかなか開けれませんよ？

屋敷の中へと入れてもらうと中も広い！なんか高そうな調度品が飾ってある！

「俺は一人暮らしでな。使用人も居ないんだ」

グレンさんが私を運びながらいう。
多分グレンさんの部屋へと運ばれているのだろう。
・・・うわ～・・何か恥ずかしっ。男の人の部屋なんて入った事ないよ～。

「俺の部屋だ。ここの椅子に座ってろ」

ガチャリとグレンさんが部屋のドアを開け見た目からは想像できないほど丁寧な動作で椅子に

座らせてくれた。
にしても・・グレンさんの部屋殺風景だ・・
グレンさんは棚から救急セットだと思われる物を取り出した。
「ほら、足を出してくれ」
そう言われてズボンの裾をまくる。
「染みるかもしれんが我慢しろ」
・・・おおう。今私の前にはグレンさんが跪いて手当して下さってます。
くっ・・・。は・・恥ずかしい！薬もちょっと染みる・・・。
薬を塗り終えたグレンさんは丁寧に包帯を私の足首に巻いていく。
「終わったぞ」
「ありがとうございます」
・・え～と、これからどうしたらいいんだろ？
「・・・服の下に怪我は？」
・・・・服は脱げませんよ？これでも女ですから・・・・
ああ、やっぱり男に間違われていたんですね・・・
「すみません・・実は・・あの」

「なんだ？怪我をしてるのか？なら早く脱いでくれ」

無理です無理です

「違うんです！・・わたし・・・女です！」

そう言った瞬間時が止まった気がした。
グレンさんの無表情が驚きの表情へとかわる。
そうして一気に顔が真っ赤になった。

「そ・・そそそそうか。す、すまない！」

「いえ・・いつも間違われるんです」

本当に何時も間違われるんです。女の子に告白された事もあるほどに・・・。

「そうなのか・・」

「ええ」

それから暫しの沈黙の後、私のこれからについてグレンさんと話し合う事になった。

これからよろしくお願いします

これから私はどうしよう。

それをグレンさんと話しあっていた。

「ユーキは何故あそこにいたのか分らないのか？」

何故あそこにいたのかと私の前に座っているグレンさんは私に聞いてきた

何故いたのかわからない。

でもきっと故郷からは遠く離れていると思う。

帰り道も分らないし、知り合いもいない。

「私は何処にも行くところがないのです」

そう言ってじっとグレンさんの言葉を待った。

可能なら此処においていただきたいが、それは余りにも迷惑をかけすぎるだろう。

でも、この世界には私は行くところが無いのだ。

「そうか・・では此処に住んだらどうだ？」

「・・・いいんですか？」

思いがけないグレンさんの提案に聞思わず聞き返す。

「俺が拾ったのだから最後まで面倒をみよう」

・・・・・なんて良い人だ

「ありがとうございます・・・では私を使用人として雇っていただけませんか？」

「そんな事しなくても生活に苦労はさせんぞ？」

「いいえ、働かせて下さい。命を助けていただいた御恩、私はどう返すべきか迷っているのですが
せめて今できる事で御恩をお返ししていきたいのです。それに何もせずに此処にいる事は出来ません
だいたいの仕事は出来るので何でも申し付けて下さい。どうか働かして下さい。」

そ言ってグレンさんへと頭を下げる。

「頭を上げてくれ・・正直助かるが・・・良いのか？」

頭を上げてグレンさんの目を真っ直ぐ見て返事をする。

「はい、お願いします」

「では・・これからよろしく頼むよ。ユーキ」

「よろしくお願いします。グレンさん」

こうして私はグレンさんの使用人としてグレンさんの家で生活していく事が決まった。

使用人としての第一歩

「部屋は好きな部屋を使ってくれ」

私は何処に住めばいいのかと聞くとグレンさんはそう答えてくれた。
この家はどこもかしこも広いので部屋も広いのだろう。
正直言って気が引ける。狭くて小さい部屋で十分だ。

「はい。あの・・使用人の制服とかありますか？」

「ああ、それならあるにはあるが・・」

どんなのだろう？定番はメイドさんだよね。でも私は男性用が良いや。動きやすそうだし。
男として振舞った方が何かと有利だし。男に間違えられるし・・・

「男性用しかないんだが・・・」

「あ、そうなんですか？それは好都合です。全然構いませんよ。
むしろ男性用がよかったので」

「そうか・・では後で持ってくるから着てみてくれ」

「はい。ありがとうございます」

よしっ！これから使用人としてバリバリ働くぞ！
少しでも恩を返さねばっ！

と心の中で意気込んでみる。

「あ・・それから私は男として雇ってください」

「ん？何でだ？」

グレンさんは首を傾げながら聞いてくる。
仕草可愛っ。萌え！
（優季だからそう見えるのであって他の者が見たら卒倒ものである）

「男として働いた方が都合が良いのです。それに男にしか見えませんから」

「そうか・・。わかった」

「よろしくお願いします・・・あ」

「ん？」

「グレンさんを何とお呼びしたら良いのでしょう？雇い主をさん付けは・・・」

う～ん・・・ご主人様？グレン様？主様？
何て呼べばいいのだろう？

「気にしないでくれ。さん付けの方が良い・・。堅苦しいのは苦手だ」

「そうですか？ではグレンさん・・とお呼びします。でも他の方がいらっしゃる場合は
グレン様と呼ばせていただきたいです」

一応最低限度のけじめだ。

「気にしないが・・そうすると決めたならそうすると良い」

「はい。グレンさん」

これからの使用人生活どうなるかは分からないけど
頑張っていこうと思います。
お父さんお母さん私は良い人に拾われました。
どうぞそちらから私を応援していて下さい。

使用人の生活

使用人としてグレンさんに雇ってもらえる事になってから早数日がたちました。

なかなか充実した日々を送っております。

朝は早く起きて庭の掃除と整備。今まで使用人さんが居なかったせいで草は伸び放題でしたし
お世辞にも綺麗とは言い難い庭だったので頑張って綺麗な庭にする計画を立てつつ、まずは草抜きが
最近の朝の日課になりました。

それから朝食の準備へと取り掛かります。
グレンさんは何でも食べてくださるので作りがいがあります。
朝食は同じテーブルで私も頂きます。グレンさんの提案でこうなりました。
無表情で食事を口に運ぶ姿はさながら小動物のよう（他から見たら獰猛な肉食動物の食事

表情が読み取りにくいですけどデザートを食べている時は少し嬉しそうに見えるので
甘党なのでしょうか？これからは甘味にも力をいれてみます。

ギャップ萌えです！ああ　萌える！
胸にキュンとくる！素敵！素敵です！

ゴホン・・・失礼しました。

ええと、それからグレンさんはお仕事へとお出かけに。
騎士団長をされてるそうです。

昼の間は私は屋敷のお掃除をしてます。
何と言いますか・・こう・・・もの凄い感じになってた部屋があったので・・・。

どれだけ掃除してなかったんですか！？って感じでした。
埃の舞う部屋の中を綺麗にすべく掃除セットを持ち込み掃除してます。
まだまだ掃除すべき部屋は残っていますが・・・

掃除が一段落したら夕食の買出しですね。
グレンさんに教えて頂いた市場への道を通って市場へと。
夕食の食材を買って屋敷へと帰ります。

グレンさんが帰ってこられたら朝と同じく同じテーブルで食事。
その日あった事を報告します。グレンさんもその日あった事を話してくれて楽しいです。
無表情ですけど何となく表情が理解出来るようになってきました！
微妙な変化ですけど・・

こうして一日が終わっていきます。

ああ充実してる一日！

騎士団長の今日この頃（前書き）

短いですが・・・

騎士団長の今日この頃

今はきっと今まで生きてきて一番幸せな時だろう。
それがここ数日のグレンの心の中である。
自分の家の裏の森（入ったら並みの人間では出て来られない）で出会った人物が
彼の幸せの源なのである。
初めて会った時から自分を怖がらなかった彼女に彼が好意を抱くのもまあ当然と言えば当然だろう。
話しているだけでこの上なく安らぎ幸せなのである。
彼女の全てに惹かれているのだ。

今日もユーキの朝食は美味しかった。
目をそらさずにいてくれた。
家の仕事もあそこまでしなくていいのに。
俺を怖がらずにいてくれる。
笑顔で俺といてくれる。

全部が初めてで全部が嬉しい。

そんな幸せ一杯のグレンは今日も一人ぽつんと自分の仕事をこなしていた。
そして超ご機嫌なのだが他の人からみれば何時も以上の威圧感のあ

るオーラが発せられていた。
こうしてグレンは仕事が終わるとさっさと家に帰るのだ。

――今日の夕食は何だろうな――

軽い足取りで彼女が待っているだろう家へと帰る。

朝の出来事

ブチリ　ブチリ　ブチリ　ブチリ　ブチッ

今私は無心で朝の習慣となった草抜きに励んでいる。
清々しい朝の空気の中、綺麗な庭へと近づけるべく草を抜く。

ブチリ　ブチリ　ブチッ　ブチリ　・・・・・・

・・・・なかなか終わらない。
・・・・・だいたいこの庭は広すぎる。

「ふぅ・・・今日はこの辺で終わりますか」

取りあえず全体的に三分の一程しか終わっていないがきりの良い所で終わらせ朝食の準備へうつる。
今日は・・・何にしようかな？

献立を考えながら調理場へと向かう。
最初は使い慣れていなかったけど今は使いこなす事が出来る。

朝食が出来上がったらグレンさんを起こしに行く。
この屋敷は広いので起こしに行くのにもそれなりに歩かなくてはならない。

本当に無駄に広いのだから・・・・

朝食が冷めてしまわないように早足でグレンさんの部屋へと向かう。

長い廊下を進む。　進む。　進む。　進む。　・・・まだつかないのか！？

朝食冷める！と思いながらさらに早足で進み、やっとグレンさんの部屋へと着いた。

・・・・・・・遠かった。

あっちでの家は普通に家族三人で暮らすのに丁度いい家だったからなぁ・・・。

逆に此処は二人しか住んでないのに広すぎる。

無駄です。広すぎ。移動に疲れる家って・・・・。

気を取り直してグレンさんの部屋のドアを叩く。

「グレンさん。朝ですよ、起きて下さい」

シーーーーーン

「グレンさーん？寝てるんですか？」

反応なし。

「入りますよ～？良いんですね？」

グレンさんの部屋のドアは用事があったらいつでも入っていいとの事で

鍵を開けてもらっている。

こうして起こしにくるのは二回目だ。昨日は残業があってお疲れの

様だったから
きっとグッスリ眠っているに違いない。
本当はまだ出勤まで時間には余裕があるので寝かしてあげたいのだが、以前起こしにきて
気持ちよさそうに寝てたので起こさず一人で朝食を食べて、仕事をしていて時間がきたので
起こしに行こうとしたらグレンさんは既に起きていて
「朝食・・・食べたのか？」
何か凄い顔でそう聞かれた。
「はい。グレンさんの朝食は別に用意してますよ」
そう返したら、
「そう・・・か」
あれーーーー！？幻想ですか？何か・・・何か・・・・・・
グレンさんに悲しそうにペタリとふせた犬耳と尻尾が見えるーーーーーー！！
何かプルプルしてる！え？悲しかったんですか？！寂しかったんですか？！
なんて可愛いんですかっ！けしからんっ！
でも顔がちょっと反対に凄く怖くなってきてますよ！
ゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・

いや！ちょっ！地響きがしそうな程のオーラだしてるんですけど！？
こ・・これは謝った方が良いのか！？そうなのか？どうする！？わたしっ！？

よ・・よし！謝るぞっ！・・・・にしてもグレンさん無言で凝視してきてる。
メッチャ見てる。見てる。見てる。見てる・・・・何時まで見てるんです――――！？
あ・・何か悲しそうな目してる。捨てられて子犬かっ！そんな目で私を見ないで下さい！

謝る。謝るんだ。

「グレンさん・・ごめんなさい。でも・・グレンさんお疲れの様でしたから寝ていて欲しくて・・
気を悪くされたのでしたら謝ります。すみません・・・」

そう言いながらグレンさんを見つめる。

「ん。でも・・・・朝食は一緒に食べたい。」

少し頬を染めながら（優季だから分かるのであって他の人には判別不可能）
グレンさんは呟いた。

・・・・どんだけ私をときめかせたら気がすむんですか？
あーーーもうっ。グレンさん好きだーーーー！！
グレンさんは私の嫁！！

「そうですね・・私もグレンさんと一緒に食べたいです。今度からはできるだけ起こしますね」

「そうしてほしい」

柔らかく微笑んで（こちらも優季だから以下略）そう言って下さいました。

こんな事があってから必ず二人で朝食をとるようにしました。
グレンさんも朝食の時間に起きてない事はなくなりました。
という事は昨日は随分お疲れだったんですね。

やっぱり寝ててほしいのですけどそうすると後で不機嫌になると思うので
起こすことにします。

ガチャリとドアを開けてグレンさんの部屋へと入る。

グレンさんが現れた。優季は２００のダメージをうけた。（前書き）

優季がちょっと怪しいので
そんな優季が苦手な方はご注意下さい。

グレンさんが現れた。優季は２００のダメージをうけた。

「グレンさーん。朝ですよ～。朝食の時間ですよ～」

グレンさんの部屋へと入ってまずは声をかける。

反応なし。

反応がなかったのでグレンさんの寝ているベットへと近づいてみる。

ああ・・。爆睡中です。

気持ちよさそうに寝てます。

グレンさんの威圧感も寝ている時は普段の三割減ですね。

あーーー、寝顔可愛い。何時もとはまた違った良さがある。

何時もは眉間によってるしわが無いとか。

ちょっと開いてる口とか。

いつもより少しだけ無防備なところとか。（他人からしたら十分な程威圧感はあるのだが・・・・

うふ、うふふふふふ・・・・・・・

・・・私まるで変質者のようではないですか。涎なんて出てませんよっ！

いかん、いかん。じっくり寝顔鑑賞だなんて・・・・・したいけど今は起こすのが先決ですね。

「グレンさーん。起きてくださーい」

結構近くで声をかけてみる。

少し動いたけど起きる気配はなし。

本当にお疲れのようだ。

でもここは心を鬼にして起こすことを続行する。

起こして欲しいと言ったのはグレンさんですからね。文句言わないでくださいね。

「グレンさーん。朝食冷めますから、起きて下さい」

今度は揺すってみる。

「んぅ・・・ん？・・・ユーキ？・・朝食？」

うっすら目を開けながら反応してくれた。

ゲホッ・・・・グレンさんの反応が可愛すぎて辛い・・・。

（ユーキは理性に１００のダメージをうけた。残りポイントはあと僅かだ。踏ん張れ。踏ん張るんだ！）

「そうですよ。朝食です。起こさないほうが良かったですか？」

そう問うと

「いや・・起こしてくれて・・嬉しい」

（優季のみにわかる）笑みで返事がかえってきた。

ガハッ・・・・

（さらにダメージをうけた。理性が切れる前に撤退。撤退だ！）

選択肢は　撤退ｏｒ襲う　の二択だ！

撤退を連打する。早く動くんだ私！

「では・・・着替えて来てくださいね」

ドアに近寄りつつグレンさんにそう言ってそそくさとドアを開ける。

「わかった・・・起こしてくれてありがとう」

（優季にのみ以下略）でダメ押しの微笑つきである。

「い・・・いえ、いえ！では、待ってますので！」

私は急いでグレンさんの部屋から出た。

もう私の残りポイントゲージは赤だ・・・ギリギリセーフ・・・セーフ・・セーフ？

このままいくと変質者（グレンさん限定でね）になりそうな自分が怖い・・・・

・・・・さあ気を取り直してグレンさんと朝食だ。

はやくダメージを回復したい・・・・・。

副団長の報告。（前書き）

短い小話です。

副団長の報告。

どうも☆初めまして☆
騎士団副団長のヒューイ・ゼイセンで――す☆
え？テンションがウザイって？初登場ではしゃいでんだよ☆

今日は俺の上司であり友人のグレンが最近変な事について語ろうとおもうよ☆

変な点

そのいち

何かオーラが怖い。マジ怖い。以前の五割まし。
そのオーラのせいで隊員の大半が被害にあった。気絶した。
かく言う俺も初めてそのオーラを感じた時は気絶しそうになった。
マジやばい。
あれはもう兵器の域だ。

（本当はグレンから発せられる幸せオーラなのだが他者からすると負のオーラ、邪悪な威圧感に
感じるらしい）

そのに

やけに早く家に帰る。
以前は夜遅くまで仕事していたのにさっさと帰る。
彼女でも出来たのかと思ったがアレに惚れる女はいないと思う。

一目見て泣いて逃げらるのでグレンの傍には女がいた事がない。むしろ人がいた事がない。

（只今絶賛同居中☆夫婦かと思われるような雰囲気です☆）

そのさん

たまにグレンの仕事部屋にいくとボーッと窓の外を見てる事がある。グレンが外を見ていると見ていた先にいた鳥がボトリ・・と気を失って落ちていくのを見た。
どうやら動物にもあのオーラは有効のようだ。

（その後それをみたグレンさんは悲しくなり、ユーキが落ち込んだグレンさんを慰めた）

以上、報告終了。

変になった理由を知りたいものの近づくと気絶すると思うので遠くから見守る方向で
今後も報告していきたいと思います☆

朝食での疑問

「どうですか？お味は？」

只今グレンさんと一緒に朝食中です。

「うまい・・・」

何時も通りの嬉しそうな顔（他からみたら無表情）で答えてくれました。

嬉しいです。作りがいがあると言うものですよ。

「そうですか・・でも、もっと美味しく作れるように頑張りますね」

向上心は大切ですよね☆

グレンさんの健康の為にも美味しく栄養バランスの良い物をつくらねば。

「今でも十分うまい」

「ふふ・・ありがとうございます」

二人でほのぼのとした空気の中朝食を食べる。

ところで最近気になっていたことがあったのでグレンさんに聞いてみる事にした。

「グレンさん・・・職場でもきちんと食事食べてますよね？」

私が使用人になる前のグレンさんの生活を聞いて心配だったのだ。
もしかしたらろくな食事をとっていないのではと。
そう聞いたらピタリとグレンさんの動きが止まった。
「・・・グレンさん？食べてないんですか？」
グレンさんを見つめながら聞いてみると目が泳いでいる。
・・・食べてなかったんですね。
ううっ・・・不覚です。もっと早くに聞いていれば良かった・・・。
「食べてなかったんですね。・・そうですか」
「いや・・その・・それは・・」
グレンさんは挙動不審だ。
ふ・・・ふふふふふふふふふ
「グレンさん・・・きちんと食べてくださってなかったなんて・・ふふ」
「す・・・すまない」
少しばかり黒いオーラをとばしてくる優季に冷や汗を流しながら謝る。
「なら・・私が昼食を作ってグレンさんの職場まで届けましょうか

？」

一度でいいからグレンさんの仕事してる姿みてみたいんですよね・・・

どんな感じなんでしょう？あ～でも迷惑かな？でも見てみたい～！

「それは・・嬉しいけど、大変じゃないか？」

嬉しい！？と言う事は仕事場へ行ってもＯＫって事ですね！？

ふっ・・・そうと決まれば

「ふふふ・・・何をおっしゃいますか！主の健康を管理するのも使用人の仕事ですよ！」

と意気込みながらいってみる。

「そうか・・・じゃあ頼もうか」

よしっ！許可いただきましたっ！

「ええ・・お任せ下さい！必ずや美味しく栄養バランスのとれた昼食をお届けします！」

頑張るぞ！美味しい昼食を作ってみせる！

べ・・別に仕事している姿をみて萌えたいとか一緒にいる時間を増やしたい何て下心はありませんからねっ！本当ですよ！

「ありがとう・・ユーキ」

微笑みながら言ってくださりました。
ああ、その笑顔だけで一生グレンさんに美味しい食事を作ったとしてもお釣りがきます！

「では早速今日のお昼にうかがいますね」

「ああ、わかった話はしておく」

「はい、では楽しみにしていてくださいね」

よし！次回はグレンさんの職場へ訪問です☆

朝食での疑問（後書き）

短いですね・・・

職場訪問☆城への道のり

「でーきーたーーーー☆」

できました☆優季特製サンドイッチ☆愛情たっぷりです？

「ふ・・さあ早くグレンさんの所へと行かねばっ！」

出来上がったグレンさんの昼食をバスケットへと一先ず入れておき着替える為に

自分の部屋へと急ぐ。

汚い格好をしてグレンさんに恥をかかせる訳にはいきませんから！

最近はこの屋敷の広さにも慣れてきたのでそれほど疲労感を感じる事もなく着いた

自分の部屋のドアを開けて入る。

私の部屋は狭くもないが広くもないという丁度いい大きさの部屋だ。

家具はグレンさんが私のために新しく用意してくれたらしい。

本当にいくら恩を返しても返しきれないぐらいお世話になっている。

「さて・・と、じゃあ使用人用の外出用コートを着て行きますか」

クローゼットの中を見て決める。

このクローゼットも新しく買って下さったらしい（グレンさんは何も言わないが）

綺麗な木目の木で出来たこれはきっと高いのだろうなぁ。

うう・・・・グレンさんにはお金もきちんと返さないと。

一応汚れていてはいけないので使用人服も洗濯した新しい物に着替えておく。
この屋敷の使用人服は白と黒でまとめられていて中々センスの良いものだ。

白いシャツのボタンを外して脱ぎ新しい物へと着替える。
因みに胸は女だとバレないよう一応さらしで巻いている。
まあ・・・こんな事しなくてもバレないよ・・私の経験がそう言っている。

ズボンも一応新しい物に変える。
着替え終わったところで脱いだ服をハンガーにかけてクローゼットの中にしまう。
後で洗濯場へ持っていこう。

最後にコートを羽織って

「よし！着替え完了！グレンさんの元へ行こう！」

急いで部屋から出て調理場へと行きバスケットを片手に

「いざ！グレンさんの職場へ！」

意気込みをいれつつ玄関へとむかい外へと出る。
ギィィィと音をたてながら門を開ける。
やっぱりこの門は重いと思う。グレンさんも普通の人は開けられないと言っていた・・・。
え？私は普通じゃないのかって？もうそれは父のせいと言うことで・・。

この屋敷はグレンさんの職場のお城からは離れているものの多分昼までにはつけるだろう。
この周辺は森や草原の多いのだが城下町は色々な店が出揃い大いに賑わっている。

さ、早く行きますか。

バスケットの中身の事を考慮しやや早足で歩くのにとどめる。
う～んやっぱりお城はちょっと遠いよねぇ。
三十分ぐらいで着くかな？

もくもくと城へと続く道を歩いていく。
あまり外には出ないので周りの景色を楽しんでみる。

空青い・・・あ、鳥飛んでるなぁ。
早くグレンさんに会いたいなぁ・・・。

・・・・景色を楽しむと決めた三秒後にはグレンさんに会いたいと思った私は重症ですか？

そんな事を考えながら歩いていき城下町へと着いた。

「おや、こんにちわ！今日は良い果物がはいってるよ！」

城へと続く道を歩いている途中私に声をかけてきたのは何時も私が野菜や果物を買っている
店の奥さんであった。セリアナさんと言う女性だ。
少しふっくらとした４０歳ぐらいの女性で暖かい雰囲気をかもしだしている。

お母さんって普通はこんな感じかな？
私のお母さんはちょっとアレだったけど・・・。

「そうなんですか。でも今からグレンさんの所へ行かなければならないので・・」

野菜や果物はいつも美味しい物をおいてくださってるのでそれ以上となると本当に美味しいのだろうなぁ・・。でも残念だけど今回は諦めるかな・・・・。グレンさんに食べてもらいたかったなぁ・・・。

「なんだそうだったのかい。じゃあおいといてあげるから後で買いにきなさいな」

「え？いいんですか？」

「いつも贔屓にしてもらってるし、旦那もユーキの事気に入ってるしね」

「う～じゃあお願いします、ありがとうございます」

「いいんだよ。家族そろってユーキの事は気に入ってるからね」

「ははっ。嬉しいです。では、もういかなくては」

「そうだね、じゃあ後でよっとくれ。グレンさんによろしくね」

「はい、また」

おお！やったぁ！良い食材ゲット！

あ、セリアナさんとそのご家族との馴れ初めはまた後日。

今日の夕食に美味しい食材を使える事にご機嫌で城への道を進む。

職場訪問☆城に到着

「でかい・・」

これは城にようやく到着した私の言葉である。

長い道のりをへて到着した私はこれから門へと行きグレンさんの職場へとむかう
つもりだ。時間も丁度いいくらいになっているはず。

にしても城は立派だとしみじみ思う。あちらにいた頃はこんな城本かテレビでしか見た
ことが無かったからかもしれないが。

「・・はやく入ろう」

城を眺めるのを止め門へと近づく。
門番と思わしき人が二人、門の左右に立っている。
胸ポケットからグレンさんに書いて頂いた入門状を取り出す。
入門状にはグレンさんのサインと消印、そして入門理由が書いてある。

・・・・う～ん・・不審人物かと思われたのかなんなのか門番のお兄さんの視線が痛い。
早くこれを渡して入らせてもらおう。

「すみません」

右にいた門番さんに声をかける。

「ん・・あ！ああ・・何かご用でも？」

私を凝視していたというのにいざ話しかけるとどもられた。
警戒されているのかな・・・？う～ん？

「はい。グレン様の使用人をさせていただいておりますユーキと申します。
グレン様への用事があって来させていただきました。こちらはグレン様から
預かった入門状です。ご確認ください。」

そう言いながら入門状を渡すと面白いぐらいに門番さんの顔色が変わった。
何故か赤かった顔がさっと青へと変わり蒼白になっていく。

「も・・申し訳ありませんでした！どうぞお入りください！」

腰を９０度に曲げて頭を下げられた。
いやいやいやいや、何でですか！？頭を上げてください。
ああ左の門番さんがこちらを見ている・・・助けてくださぃぃぃぃぃ。

助けを求める視線を投げかけてみる。
ヘルプ　ミーーー

おお！気づいてくれました！
さあ　助けて下さい！

左の門番さんが近づいてきてくれました。

「おーい、おい。いくら美人だからっ・・・て・・え！こ・・この入門状は」

はじめは普通だった左の門番さんも、同じように蒼白になっていき頭を下げられました。

は・・早く入りたいです。

埒があかない・・・。

「もう・・・入ってもよろしいですか？」

さすがに苛々してきたので早めに通してもらいたいものだ。

「「も・・もちろんです！どうぞお入り下さい」」

二人して息ぴったりに叫ばれた。

じゃ・・じゃあ入りますよ？入っちゃいますよ。いいんですよね・・・。

城への入口へと足を進める。

やはり大きいなぁ・・・。　と思った所で頭に浮かんだ疑問。

・・・グレンさんの職場へはどうやって行けばいいんんでしょう？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6263v/

強面騎士団長と異世界人

2011年12月28日01時25分発行